

幻少  
想女  
心友

cydonianbanana

## 最初の街

幻想少女がどこからやってくるのかを知る人間はいない。彼女はある日、横断歩道をわたっている最中に、自分がすでに生まれているということに気づく。そこに居合わせた誰もが少女の来歴を知らないし、バスの運転手はバス停に立っている少女を無視して素通りするし、セブンイレブンの店員は黙って菓子パンを持ち去る少女に目をくれようともしない。少女の姿は誰にも見えないのである。毎日のように街をうろついては、すべての事物が自分を透過するのに身を任せる。夕方までには国道沿いの廃屋に戻り、冷たいコンクリートの床に眠る。

一ヶ月経ったところ、高架下のゴミ捨て場に打ち捨てられた《ぬいぐるみ一般》が、最初に少女を見つける。プラスチック製の黒い瞳は微動だにせず、イトーヨーカドーで手に入れた服に身を包んだ少女を見つめる。こんには、と少女は言う。その細い腕に抱かるのに身を任せ、《ぬいぐるみ一般》はゴミ捨て場を後にする。

## 森

幻想少女は街を離れ、列車とバスを乗り継いでシーズンオフのスキー場へ向かう。スキー場の裏手の森へ入ると、そこに彼女と同じ幻想少女たちが洞穴や自作の小屋に棲みついて暮している。樹上生活を営む幻想少女Aから道具を借りて、少女は大きな榆の木の上に自分の住み処をつくりはじめ。樹上小屋が完成するまでの間、幻想少女Bの丸太小屋で寝泊まりをする。幻想少女Cの棲む洞窟から黙って持ち出したボロ布に包まれて、少女は《ぬいぐるみ一般》といっしょに眠る。

## 夢

一般に、幻想少女は夢を見ないことが知られている。

## 紙片

ある朝目覚めると《ぬいぐるみ一般》の手に一枚の紙片が握られている。完成した樹上小屋のベッドに腰掛けてクルミを齧りながら、幻想少女はそこに書かれている文字に目を通す。

《BO18D\$N8IFH\$J:2\$rD\$M\$K8+\$D\$E\$I\$K\$B8:\$\_\$H\$7\$FAIDj\$5\$1\$?>/=w\$NHa7`i#88A|N\$J\$+\$X\$HCh\$E\$j\$K\$5\$1\$?H`=w\$N1eSM\$,i"\$=\$1\$r@8\$`\_@\$7\$?`=90-\$J:2\$^\$GFO\$/\$3\$H\$O\$J\$/i"\$^\$?`\$=\$N;v<B\$K;u,\$,\$\_9\$K\$N\$OH`=w\$GGO\$J\$/i"\$9\$Y\$F\$N856`H\$J\$C\$?O18D\$N\$\*`\$=\$K\$Y\$-:2\$K\$1\$+\$J\$1\$J\$1\$1\$#》

少女は眉をしかめる。丸められた紙片は、その日のうちに落ち葉や木の枝と一緒に燃やされる。焼き芋は幻想少女たちにとって一番のご馳走である。

## ある一日

午前七時、朝食を終えた幻想少女は屋根に積った初雪を降ろし、その足で兎毘の様子を見に出かける。

午前九時、拾ってきた新聞紙で樹上小屋の壁を内側から覆い、すきま風を閉め出す。正午、幻想少女Aにもらった野苺のジャムをパンにつけて食べる。

午後一時、スキー場からバスに乗り込み、知らない街で降りる。文具屋の主人は日記帳と万年筆、青いインク、トランプが一つずつなくなっていることに気づかない。駅前ユニクロには同じ色のマフラーや毛糸の手袋が山のようにあるので、その中から一つが消えたところで世界は何ひとつ変わらない。ファミリーマートの店員が菓子パンコーナーの前で首をかしげるころ、少女はすでに帰りのバスに乗っている。

午後七時、兎の肉をもつて幻想少女Aの樹へ向かう。冷めた鍋の横に散らばるトランプの前で「ページワン」と彼女は言う。

午後一時、日記帳にはこう書かれている。

《わたしたちが本当に夢を見ない生き物なのだとしたら、きつとあれは、この子が見ている夢。わたしはそれを横から観ている。そういえば、この子にはまだ名前がない》  
少女は《ぬいぐるみ一般》を抱いて眠る。

### 《ぬいぐるみ一般》の夢

一人の少年が丘の上に立ってカメラを構えている。カメラの視線はこちらへ向いている。少年の頭上でロープウェイの綱が頂上を目指して伸びている。

### 対話

幻想少女が尋ねる「いつもあなたの夢に出てくる人、あれは誰なの？」

《ぬいぐるみ一般》は何もこたえない。

### 海に住む少年

幻想少女は物語を消費する。ある日、彼女は幻想少女Bの本棚の中に『海に住む少年』と書かれた背表紙を見つけ、それを手に取る。

《大海原に浮かんでは消える町に、少年は一人で住んでいた。一人で目覚め、一人で食事を摂り、一人で学校に行った。歴史や国語の教科書に書かれている人物たちが、彼にとつてもつとも身近な親戚だった。地理の時間に地図帳を開くと、一面真っ青なペーシが最初から最後まで続くだけだった。すべては海拔〇メートルなので、苦労して覚えた等高線の引き方は役に立たなかった。あらゆる縮尺で描かれた海は、それが海であるがゆえに縮尺の意味を持たなかった。少年は青い地図にレムリア大陸とムー大陸を描き込んで地理の時間をすごした。

数学の問題集との会話を、彼は毎日楽しみにしていた。「この三角形の面積を求めてください」「はい、八一平方センチメートルです」「では、Aさんが受け取ったお釣りはいくらでしたか？」「はい、Aさんは一三円のおつりを受け取りました。なので、もうおやつを買うお金は残っていません」

時おり、少年は無性に文章を書きたい気分になった。彼はノートの切れ端に、一生懸命文字を綴った。

「もしよければ、一緒に晩ごはんを食べにいきませんか？」

「量子はスリットを通り抜ける前に、スリットが二つあることを知っています」

「僕は信仰というものがよくわかりません。何を信じればいいのでしょうか。何を根拠に信じればいいのでしょうか」



ンを読んでいるとき、ページの間から一枚の写真が顔を出す。写真には、丘の反対側へと続く道が映っているが、そこに彼の姿はない。  
 幻想少女は夢を見ることができない。だから《ぬいぐるみ一般》が、今日も代わりに夢を見る。

### 幻想少女B

少年βの顔が思い出せなくなってしまった、と言って幻想少女Bが手首にナイフをあてる。一般に、幻想少女が少年のことを忘れつつあるとき、少年もまた幻想少女のことを忘れつつあるということが知られている。被忘却は、幻想少女たちの間でもっとも多い死因のひとつである。

少女たちは黒い服を着ている。幻想少女Bもまた、黒い服を着ている。

### 幻想少女X

幻想少女Xがどこかの町からやってくる。

### 涎

幻想少女に紙片が届かなくなる。なにがあったのかと《ぬいぐるみ一般》に尋ねても、《ぬいぐるみ一般》は何もこたえない。

あるとき、少女は幻想少女Xが住む洞窟へ忍び込み、そこでお菓子の箱を見つける。箱の中にはたたくさんの紙片が詰め込まれており、そこにはたとえば、このような文章が綴られている。

《B%@@%\$%9%-OOK`LW\$7\$F\$\$\$\$/i#>CLWJ\$J\$S\$@i#》  
 《BHI\$N?\$O@D\$1\$I\$P@D\$\$\$|I?<\$/i"K-qA\$K\$J\$K#3Z4o\$K\$?\$H\$(\$K\$J\$I%i"%!%\$%H%V%ki<\$O%U%ki<%H\$N\$h\$&\$G\$"\$j:i"%@i<%/V%ki<\$O%A%"m\$N\$h\$&\$G\$"\$j:i"=\$1\$,.\$5\$I\$K\$G;\$\$?"D4\$G\$"\$I\$P"2:\$N6A\$-\$O%Q%\$%W%\*%k%,%s\$N\$=\$1\$K;w\$ki#?"\$O2;\$G\$"\$j:i"@D\$|I\$B?AXE\*\$J2:\$OB>\$K\$J\$I#》  
 《evernoteB\$r@0M}\$7\$F\$K\$H8+3P\$(N\$J\$S\$%Ni<%H\$,=P\$F\$/\$ki#=\$3\$K\$OivF}K<\$O6KC<\$KBPN)\$9\$K\$b\$N\$NAn9g\$G\$"\$ki#6Q9U\$N<h\$I\$?0I\$D\$N7ABV\$NCF\$ki"5a?4@-\$HIs?4@-\$NI?F0\$r4^\$s\$G\$S\$ki#F}K<\$O\$"\$i\$f\$K4o41\$N\$J\$+\$G\$b\$C\$H\$bL@NF\$K;M<i855r<(:6\$9\$kiW\$J\$I\$H\$"\$ki#F8Dg\$N=q\$/J8>O\$H\$7\$F"\$i\$\40`z\$K6a\$si#》

紙片を読んでいると、突然背後から叫び声上がり、何者かの激しい蹙が聞こえてくる。少女は即座に振り向き、幻想少女Xの首を絞めて息の根をとめる。幻想少女Xの死体は、涎まみれのまま川に流される。

### 涙

幻想少女は一般に涙を流せないということが知られている。

### 手紙

ある朝目覚めると《ぬいぐるみ一般》の手に封筒が握られている。中には数枚の便箋

が入っており、そこにはこう書かれている。

「僕はものごころつく前から母と死に別れていて、だから母親と触れたり話したりした記憶がない。顔も知らない。押し入れにあった僕の小さい頃の写真アルバムを探しても、母親の写真はひとつもなかった。たぶん祖父が処分したんだと思う。祖父は母のことをひどく嫌っていたようだから。「お前の父親も、あの女が殺したようなもんだ」祖父が僕にこう言ったことを居間でも良く覚えていて。だから、僕は高校を出るまで祖父と二人で暮らしていたけれど、母のことを訊ねたことは一度もなかった。そして祖父が死んでしまった今、もう母親の真相を知ることが出来ない。ところで、エディプス・コンプレックスという言葉聞いたことはあるかい？ むかし頭のおかしな学者が、男の子はみんな、最初に母親に恋をするって説を立てたんだ。これが本当かは知らないけれど、少なくとも僕は、ずいぶん長い間、母親と女のいない日常を生きてきた。だから女という生き物のことを、僕はよく知らない。そして人間は、未知のものに対して恐れや畏れを抱くものだ。僕が君のことを想いながら、同時に別の女の子のことを想わずにいられないのも、きつとこの畏れが原因なんだと思う。ぼくにとって女の子は、とりわけ触れることの叶わない純粹なやつは、いつも僕自身の中にあつて、同時に僕の中にはなかつた。それは僕の中に絶対的に、先天的に欠けているものであつて、そしてその欠けているという事実のために、僕の中でかえって大きく肥大し、その巨大な虚像から目をそらすことが出来なくなってしまったんだ。人びとが神様を失い、そのために神様を求め続けているのと同じように、僕は女という概念を畏れ、求め続けた。君も、あの娘も、その娘も、僕にはひとりだ。だから僕には君しかいない。どうか僕の元を離れないでほしい。僕の愛しい」

ここまで読んだとき、少女はその手紙を丁寧に閉じて皿の上に置き、マッチを擦って火をつけた。手紙が灰になる過程を、少女は執拗に見つめ続けた。たとえどんな事情があつても、女の子の気持ちを裏切ることは許されないのだと《ぬいぐるみ一般》は思った。

### 幻想少女の死

久しぶりに少年の姿を目にする。かつて青年となり、若者となつていった少年は、いまやずいぶんと歳をとってしまったように見える。三〇歳？ 四〇歳？ しかし幻想少女のなかには年齢の概念がないので、少年ではなくなつてしまった少年を、彼女は不思議なまなざしで見つめている。

彼には妻と子がある。スーツに身を包んだ彼は、早朝の駅へと向かう道すがら、ふと空を仰ぎ、こう考える。

「ぼくは何か、とても大切なことを忘れてしまっているような気がする。何かとても、大切な気持ちを。大切な誰かを」

少女はすでに、致命的な被忘却に冒されていたのだった。

## 最初で最後の街

幻想少女はある日、自分がすでに死んでいることに気付いた。彼女は誰にも別れを告げずに森を後にした。彼女の樹上小屋は、次にやってくる幻想少女がうまく使ってくれるに違いなかった。

少女は列車とバスを乗り継いで、最初の街へ向かった。二〇年を経て、街の様子はあの頃から様変わりしていた。国道沿いの廃屋も、冷たいコンクリートの床も、いまはもうなくなってしまうていた。しかし唯一、高架下のゴミ捨て場だけが、当時のままに残されていた。

少女に抱えられていた《ぬいぐるみ一般》は、少女の手によって壊れた冷蔵庫の上に乗せられた。プラスチック製の黒い瞳は微動だにせず、透明な少女の姿を見つめていた。さようなら、と彼女は言った。《ぬいぐるみ一般》は、何もこたえなかった。

卒然と消えた幻想少女の余韻に身をゆだね、《ぬいぐるみ一般》はふたたび深い眠りについた。